

出生順位による性格特性と 集団課題時の行動の相違に関する検討

ソニー生命保険株式会社 樋口 万里子
横浜国立大学教育学部 高本 真寛

Effects of birth order on personality and behaviors in group discussion.

出生順位による性格特性と 集団課題時の行動の相違に関する検討

Effects of birth order on personality and behaviors in group discussion.

樋口 万里子*・高本 真寛**

本研究は、出生順位と性格傾向との関連を、性格特性の指標に自己報告式尺度と集団課題時における行動指標を用いて検討する。

これまで、きょうだい構成をはじめとした出生順位については、知的能力との関連を検討したものが多いが(Belmont & Marolla, 1973; Zajonc & Sulloway, 2007)、性格特性やソーシャルスキル、リスクテイキングとの関連を検討した研究なども見られる。また、金山・笹山(1997)は、出生順位と性格特性との間に何かしらの関連があるとした「きょうだい型ステレオタイプ」が存在するかを検討した。その結果、長子には「誠実」、末子には「外交的でわがまま」など、出生順位の違いによって異なるイメージを有していることを明らかにした。これらのことから、我々の社会には、出生順位に対するステレオタイプが存在していることがうかがえる。

出生順位と性格特性との関連

出生順位の違いによる特徴的な性格特性の把握については、日本国内に目を向けると1950年代から検討され始めた。三木・木村(1954)は、一卵性双生児の対偶間における兄弟的性格差異(「兄の方が〇〇」「弟のほうが〇〇)」の把握を目的とした調査を行った。その結果、兄的性格には「自制的」「控えめ」「几帳面」などの特徴が見られ、弟的性格には「快活・社交的」「調子もの」「依存的」な

どの特徴が見られるとした。また、依田ら(浜崎・依田, 1985; 依田・深津, 1963)は、2人きょうだいと3人きょうだいを対象に出生順位と性格特性の関連を検討した。これらの調査からは、「長子的性格(自制的、慎重、ひかえめであるが面倒なことは嫌うという傾向)」と「次子的性格(快活で活動的である反面、あまつたれ、おしゃべり、強情、依存的な傾向)」という2つの性格特性が導出された。また、中間子的性格は、「面倒くさがらずに仕事に取り組むが、よく考えないので失敗も多い」「気に入らないと黙り込む」という特徴をもつが、長子的性格および末子的性格と比較すると、明確な性格特性は見出されなかった。こうした出生順位の違いによって性格特性に差異が生じる理由には、(1)親が子どもに対してもつ役割期待への相違、(2)長子の場合は、長子としての自覚あるいはその重圧感があり、次子の場合は、次子としての解放感や年齢的に幼いことに起因する次子独特の劣等感の存在が影響している可能性を指摘した。

上述した研究からは、出生順位と性格特性との間に、何かしらの関連性があることが示唆される。他方、Lejarrage, Frey, Schitzlen, & Hertwig (2019)は出生順位とリスクテイキングとの関連を自己報告式尺度と行動指標を用いて検討を行い、出生順位とリスクテイキングの間には有意な関連性が見られなかった。また、Rohrer, Egloff, & Schmukle (2015) や Damian & Roberts (2015)、Marini & Kurtz(2011)、Bleske-Rechek & Kelley (2014) などでも出生順位と性格特性との間に確か

*ソニー生命保険株式会社

**横浜国立大学教育学部

な関連性は示されていない。

出生順位と性格の形成

仮に、出生順位と性格特性との間に関連性があるとするならば、なぜ出生順位が性格特性と関連するのだろうか。この点については、出生順位が養育者やきょうだいとの関わり方に多様性をもたらし、性格形成に影響を及ぼすと考えられている。三木・天羽(1954)では、三木・木村(1954)の結果をふまえ、一卵性双生児の親と本人を対象とした事例分析を行った。その結果、兄弟的性格差異が大きく、本人の兄(姉)・弟(妹)という意識がはっきりしているほど、親の家庭的な関わり方に違いがあることが示唆された。また、小倉(2014)は第一子、中間子、末子それぞれがそれぞれの得意分野でアピールし、親との関係を築いていくが、そこにはきょうだいの中での関わりが影響し、性格形成に影響を与えると考えた。第一子には「年長であるためきょうだいの中では体格や知能において優れており、リーダーの役割を担うため、大人になってからも、責任感が高くリーダーシップを発揮する」といった特徴があり、末子には「親に依存する子どもになり、問題児になる確率が高い」といった特徴があったとした。第二子(中間子)については、第一子のように既存の権力におさまろうとするのではなく、既存の能力を転覆することに価値を置き、革命を志向するとした。こうした特徴については、Sulloy(1996)も「長子よりも後に生まれたきょうだいの方が、革新的なアイデアや創造的な仕事によって名を挙げたケースが歴史的に多い」と指摘している。そのほか、清水(1998)や依田・深津(1963)も、子どもに対する親の接し方が異なることで、結果として子どもが親に対する行動に相違が生じ、性格形成に影響すると考えている。

一方、相川(2010)は、ソーシャルスキルの学習

が「言語的教示」「オペラント条件づけ」「モデリング」「リハーサル」という4つによって学習されることをふまえると、きょうだいの存在がソーシャルスキルの獲得に影響する可能性を指摘し、きょうだい構成とソーシャルスキルとの関連を検討した。その結果、きょうだい数や出生順位によってソーシャルスキルに違いが見られることを明らかにした。ただし、ソーシャルスキルの獲得の程度については、事前仮説における方向性と一致するものではなかった。そのため、ソーシャルスキルの獲得の程度に違いが現れる理由は、出生順位による養育者の関わり方や出生順位に伴って生じるきょうだい間の相互作用のあり方によるものではないと考察している。

役割期待が個人に及ぼす影響

役割期待(ある地位や状況にいる個人に対して、周囲の他者からしかるべき役割の実行が期待されること)に基づく役割行動は、時として個人に特徴的な役割性格を形成させる(清水, 1998)。吉田(1991)は依田・深津(1963)の結果を、「長子は親が次子のお手本となるような役割や、早く成長して次子の世話をするような大人としての役割を期待される」ために得られたのではないかと考察している。

千島ら(千島・村上, 2015; 2016)は「小集団内での個人に割り振られた役割や、関係依存的な自分らしさ」を「キャラ」と定義し、キャラが友人関係の中においてどのような機能をもつかを検討した。その結果、キャラは表面的な親密さや楽しさを求める群れの友人関係において多用され、友人関係の中における役割の意味合いが強いことが示唆された。また、友人からキャラをつけられている者は5割以上存在し、キャラを受け入れることでキャラに沿った行動を積極的に行っていた。ここから、キャラを介したコミュニケーションは

集団内で個人に役割を付与し、人間関係の形成に寄与すると推察される。

本研究の方針

出生順位と性格特性との関連を検討したこれまでの研究では、2つの要因の間に一貫した関連性が見られているわけではない(有意な関連を示した研究: 三木・木村, 1954; 依田・深津, 1963など; 有意な関連を示さなかった研究: Damian & Roberts, 2015; Lejarrage et al., 2019; Rohrer et al., 2015など)。また、多くの研究は質問紙調査による検討にとどまり、一部の研究で行動指標が用いられているが、まだまだその数が多いとは言い切れない。そこで、本研究では、出生順位と性格特性との関連性について、行動指標も含めて検討する。

本研究では、自己報告式尺度と行動指標の2側面から性格特性を測定する。自己報告式尺度については、パーソナリティ特性を5つから捉えようとする5因子モデルを採用する。また、後述するように、本研究では集団課題時における行動を扱う。そのため、個人が集団課題に対してどのような認識を有しているかを考慮するために、協同作業認識についても併せて測定する。

行動指標については、集団課題に取り組んでいるときの行動と役割に着目する。もしも出生順位に対する役割期待が存在し、普段からその役割期待に沿うように行動しているならば、集団課題に取り組むときにも同じように出生順位に基づく言動が確認されるだろう。例えば、出生順位に対するステレオタイプや主な性格特徴には、長子に対して「誠実」や「自制的」、末子に対して「外交的でわがまま」や「強情、依存的」といったものが挙げられる(金山・笹山, 1997)。これらの特徴は、集団課題時において、発言や役割といった振舞いの中で表出されると考えられる。また、特に末子的特徴として挙げられている「わがまま」など

は、集団作業時に生じる「社会的手抜き」(Latane, Williams, & Harkins, 1979)として表出する可能性がある。

以上をふまえ、本研究では、出生順位の異なる成員で集団を構成し、成員間で集団課題時の発言や役割が異なるか、また課題時に社会的な手抜きが生じるかを検討する。また、出生順位と性格特性との間に関連についても併せて検討する。

目的

本研究では、出生順位と性格特性との関連について検討することを目的とする。

予備調査

目的

本調査で使用する2つの実験課題について、課題間で記述数に差が見られるかを検討する。

方法

調査協力者と手続き 2017年10月から11月にかけて、関東首都圏の大学に在学する大学生を対象に実施した。予備調査の実施に際し、倫理的配慮および回答時の匿名性の保証に関する説明を行い、調査協力への同意について意思確認を行った。実施に係る所要時間は約15分であった。予備調査においては16名(男性6名、女性10名、平均年齢20.3歳($SD=4.76$))から回答が得られた。

実験課題 「神奈川県と東京都の観光スポットを考える」と題した課題を課した。本実験課題は2つの県都における観光スポットとなる場所を書き出す内容である。課題実施時には、「今回あなた方には、神奈川県と東京都の2つの県都について、思いつく限り観光スポットを書き出してください。書き出した数で勝敗は特につけません。できる限り多く書き出してください。時間は各6分間とします。駅名、エリアではなくその周

辺にある詳しい観光スポットを記入してください。漢字がわからない場合は、平仮名表記で構いません。携帯電話・スマートフォンの使用は一切禁止とします」と教示した。課題終了後には、年齢、学年、性別、出身地(「神奈川県」「東京都」「その他」)を個人属性として尋ねた。

結果と考察

2つの実験課題において、課題間における記述数に差が見られるかを検討するために、神奈川県観光スポットの記述数($M=13.81$, $SD=5.13$)と東京都観光スポットの記述数($M=15.12$, $SD=6.97$)に対して対応のある t 検定を行った。その結果、2つの実験課題間において統計的有意差は見られなかった($t(15)=1.10$, $n.s.$)。

予備調査の結果、2つの実験課題の内容による記述数に統計的有意差は見られず、課題による記述数の偏りは確認されなかった。したがって、続く本実験において、2つの課題の記述数の差をもって社会的手抜きを指標とすることが可能であると判断した。

本調査

目的

出生順位が性格特性および社会的な手抜き、集団課題における役割と関連するかについて検討することを目的とする。

方法

研究協力者と研究手続き 2017年11月に、大学の講義時間を利用した集合調査形式で質問紙調査を実施し、312名からの回答が得られ、有効回答者は283名(男性184名、女性96名、不明3名；平均年齢19.7歳、 $SD=1.56$)であった。このうち、後述する実験協力への依頼を承諾した実験協力者は44名(男性16名、女性28名、平均年齢20.3歳、

$SD=1.61$)であった。調査協力者に対する倫理的配慮は、予備調査と同じ手続きによって行った。

質問紙の構成 調査票は(a)パーソナリティを測定する尺度、(b)他者と協同で作業することについての捉え方、(c)個人属性、(d)実験協力者の募集の手続きの4つで構成された。

1. パーソナリティを測定するために、和田(1996)のBig Five尺度を参考に作成されたBig Five尺度短縮版(並川他, 2012)を使用した。本尺度は、「外向性」「誠実性」「情緒不安定性」「開放性」「調和性」の5下位尺度から構成される。本調査では、協力者に対する負担を考慮し、「外向性」(社会性や活動性、積極性を表す；「社会的」「話し好き」など5項目)、「誠実性」(自己統制力や達成の意志、まじめさ、責任の強さを表す；「計画性のある」「几帳面な」など7項目)、「開放性」(知的好奇心の強さ、想像力、新しい者への親和性を表す；「多彩な」「独創的な」など6項目)の3下位尺度を使用した(5件法)。

2. 他者との協同作業に対する捉え方を測定するために、長濱他(2009)の協同作業認識尺度を使用した。本尺度は「協同効用」(協同作業への効用感の強さ；「一人でやるよりも協同の方が良い成果が得られる」など9項目)、「個人志向」(協同作業に対する個人志向の強さ；「グループでやると必ず手抜きをする人がいる」など6項目)、「互惠懸念」(協同作業をすることで相互の利益が生まれるとは限らないとする互惠懸念の強さ；「協同は仕事のできない人たちのためにある」など3項目)の3下位尺度から構成される(5件法)。

3. 個人属性として、性別、学年、年齢、きょうだい構成を尋ねた。このうち、きょうだい構成については、構成人数を回答後、「長子」「中間子」「末っ子」「一人っ子」の中からあてはまる選択枝への回答を求めた。

実験手続き 本実験では、実験協力者をFigure

1のように配置し、すべての集団で長子と末子が必ず1人ずつ入るように、3人1組もしくは4人1組で構成した。実験は(1)倫理的配慮の説明と同意書への署名、(2)個人課題、(3)集団課題1、(4)集団課題2の順で実施された。「個人課題」と「集団課題1」は予備実験で使用した課題と同一であり、実験集団ごとにランダムに課しカウンタバランスをとった。「集団課題2」は、「集団課題1」で各人が書き出した記述を基に、12時から21時までの9時間の旅行プランを3人もしくは4人で作成する課題であった。個人課題1および集団課題1の所要時間は各6分間、集団課題2の所要時間は10分間とした。

実験協力者には、実験終了後に個人属性として出身地を尋ねたほか、(1)集団の中に知り合いがいたか否か、(2)個人課題と集団課題1のどちらをより意欲的に取り組んだか、(3)集団課題2において意識したことがあるかについて回答を求めた。

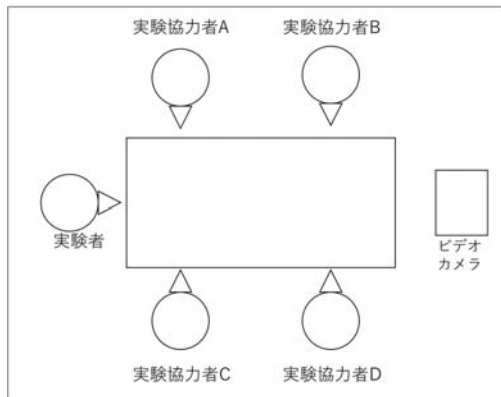


Figure 1 実験室の配置の模式図

結果

得点化の手続きと分析方針 Big Five尺度および協同作業認識尺度の下位尺度については、それぞれの尺度における得点化の手続きに従い、因子ごとに測定値を加算し、項目数で除した平均値を算出した。また、社会的な手抜き得点は、『個人課題の記述数』—『集団課題1の記述数』によ

って算出し、この得点を社会的な手抜きの指標とした。したがって、上記の指標が正の値でかつ絶対値が大きいくほど、社会的な手抜きを行っていることを示す。

集団課題における役割については、集団課題2における発言の逐語録を作成し、課題中の役割を「司会」「まとめ役」「アイデアマン」「タイムキーパー」「書記」「検索係」の6つに分類し、「司会」「まとめ役」「アイデアマン」に相当する発言数をそれぞれの役割における発言とした¹⁾。そのうえで、該当する発言数を、それぞれの役割に相当する行動として指標とした。

出生順位と個人特性および協同作業認識への捉え方の関連については、質問紙調査における有効回答者283名を対象に分析を行った。また、出生順位と社会的な手抜きおよび集団課題における役割との関連については、実験協力者44名を対象に分析を行った。

出生順位と性格特性および協同作業への認識との関連 各変数の記述統計量を算出した結果をTable 1に示す。また、出生順位ごとの記述統計量を算出し、出生順位を要因とした1要因分散分析を行った(Table 2)。その結果、性格特性($F(2, 280) = 0.33, 1.40, 0.30, n.s.$)および協同作業への認識($F(2, 280) = 0.13, 0.52, 0.24, n.s.$)のいずれにおいても有意な主効果は見られなかった。

出生順位および性格特性と集団課題における社会的な手抜きとの関連 まず、出生順位(長子・末子)と学年(4学年)を要因とした2要因分散分析を行った。その結果、学年と出生順位の交互作用は有意でなく($F(2, 39) = 0.969, MSe = 22.020, \eta^2 = 0.054$)、学年および出生順位においても有意な主効果が見られなかった(学年： $F(3, 39) = 0.206, MSe = 22.020, \eta^2 = 0.017, n.s.$ ；出生順位： $F(1, 39) = 0.027, MSe = 22.020, \eta^2 = 0.001, n.s.$)。

次に、性格傾向ならびに協同作業への認識と社

会的手抜きとの関連を検討するために、相関係数を算出した。その結果、いずれの相関係数も有意ではなく、全ての相関係数の数値が $|r| \leq .10$ であることから、変数間に相関関係は認められなかった($rs = -.077-.097, n.s.$)。

Table 1 性格特性および協同作業への認識に関する諸変数の記述統計量

	1	2	3	4	5	6
1 外向性	—					
2 誠実性	.10***	—				
3 開放性	.39***	.02	—			
4 協同効用	.40***	.00	.17**	—		
5 個人志向	-.21	-.05	.01	-.37***	—	
6 互惠懸念	-.09	.00	-.10	-.38***	.43***	—
<i>M</i>	4.35	4.35	4.32	3.88	3.24	2.01
<i>SD</i>	1.16	0.88	0.93	0.56	0.61	0.67
α	.88	.79	.77	.80	.65	.69

** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 2 出生順位における下位尺度の記述統計量

	長子 (<i>n</i> =128)	末子 (<i>n</i> =107)	その他 (<i>n</i> =48)	<i>F</i> 値
外向性	4.38 (1.14)	4.28 (1.13)	4.43 (1.33)	0.33
誠実性	4.25 (0.90)	4.32 (0.87)	4.50 (0.83)	1.40
開放性	4.28 (0.84)	4.32 (1.01)	4.41 (0.97)	0.30
協同効用	3.86 (0.60)	3.90 (0.54)	3.86 (0.55)	0.13
個人志向	3.27 (0.62)	3.19 (0.57)	3.27 (0.69)	0.52
懸念互惠	2.04 (0.70)	1.98 (0.64)	2.02 (0.65)	0.24

注1：表中の記述統計量における括弧内は標準偏差を示す

注2：分散分析における自由度は全て $df_A=2, df_e=280$ である

出生順位と集団課題における発言および役割との関連 集団課題2における発言を「司会」「まとめ役」「アイデアマン」に分類し、発言数を従属変数とし、出生順位(長子・末子)と学年(4学年)を要因とした2要因分散分析を行った(Table 3)。その結果、司会(学年： $F(3, 39) = 2.138, MSe = 18.198, \eta^2 = 0.160$ ；出生順位： $F(1, 39) = 0.190, MSe = 22.020, \eta^2 = 0.005, n.s.$)、「まとめ役」(学年： $F(3, 39) = 1.657, MSe = 5.807, \eta^2 = 0.125$ ；出生順

位： $F(1, 39) = 1.347, MSe = 5.807, \eta^2 = 0.034, n.s.$)、「アイデアマン」(学年： $F(3, 39) = 0.618, MSe = 11.495, \eta^2 = 0.052$ ；出生順位： $F(1, 39) = 0.090, MSe = 11.495, \eta^2 = 0.003, n.s.$)のいずれの主効果も有意ではなかった。また、交互作用も有意ではなかった(司会： $F(2, 39) = 0.426, MSe = 22.020, \eta^2 = 0.021$ ；まとめ役： $F(2, 39) = 0.081, MSe = 5.807, \eta^2 = 0.004$ ；アイデアマン： $F(2, 39) = 0.378, MSe = 11.495, \eta^2 = 0.021$)。

続いて、集団課題中の発言から実験協力者を「司会」「まとめ役」「アイデアマン」「タイムキーパー」「書記」「検索係」の役割をあてはめ、出生順位および学年との関連を χ^2 検定によって検証した。その結果、いずれも有意な関連は見られなかった($\chi^2_{(1)} = 0.00-0.48, n.s.$)。実験課題に関する感想は付表1の通りであった。実験協力者が実験を通して感じた感想については、全体的考察において結果の解釈の参考として用いた。

全体的考察

本研究は出生順位と性格特性との関連を、質問紙法と実験法を組み合わせることを目的とした。

出生順位と性格傾向との関連

出生順位と性格傾向との関連を、質問紙法による自己報告式尺度を用いて測定して検討した。その結果、出生順位はBig Five尺度の下位因子である外向性、誠実性、開放性ならびに他者との協同作業に対する認識との間に有意な関連が見られなかった。したがって、三木・木村(1954)や依田・深津(1963)、浜崎・依田(1985)が導出した「長子的性格」および「末子的性格」を確証するには至らなかった。これらの研究では、母親や本人に「どちらかといえばどちらに当てはまるか」という一対比較法を用いることで、性格特性と出生順位の

Table3 出生順位と学年における社会的な手抜きおよび集団課題における発言と役割

		長子				末子				出生順位の 主効果	学年の 主効果	交互作用
		1年生	2年生	3年生	4年生	1年生	2年生	3年生	4年生			
社会的 手抜き	<i>M</i>	-4.13	-2.33	—	-1.63	-0.86	-4.00	5.00	-2.40	0.027	0.206	0.426
	<i>SD</i>	5.49	3.51	—	6.00	4.05	3.46	—	3.60	(1, 39)	(3, 39)	(2, 39)
司会	<i>M</i>	3.00	3.67	—	6.63	2.43	6.67	3.00	6.20	0.190	2.138	0.426
	<i>SD</i>	3.93	2.89	—	4.69	1.99	6.66	—	4.83	(1, 39)	(3, 39)	(2, 39)
まとめ	<i>M</i>	0.88	1.67	—	2.38	1.43	3.00	1.00	3.50	1.347	1.657	0.081
	<i>SD</i>	0.84	1.53	—	2.33	2.15	4.36	—	2.95	(1, 39)	(3, 39)	(2, 39)
アイデア マン	<i>M</i>	5.50	5.33	—	4.38	4.57	6.33	1.00	5.40	0.090	0.618	0.378
	<i>SD</i>	4.18	3.22	—	1.77	3.51	4.73	—	3.27	(1, 39)	(3, 39)	(2, 39)

注1：各条件の人数は、それぞれ1年生=(8, 7), 2年生=(3, 3), 3年生=(0, 1), 4年生=(8, 10)である(括弧内は長子と末子の順を示す)
 注2：表中の括弧内の数値は自由度を示す

特徴を明らかにしている。つまり、本来は出生順位による性格傾向の差異が検出できないほどに小さいにもかかわらず、一対比較法を用いることで、疑似的に出生順位と性格傾向との間に関連が見られていた可能性がある。事実、Rohrer et al.(2015)や Damian & Roberts (2015)、Marini & Kurtz (2011)、Bleske-Rechek & Kelley(2014)では、出生順位と性格傾向との間に関連は見られておらず、両者の間には明確な関連性を見出すのは難しいと考えられる。

出生順位と社会的な手抜きとの関連

性格傾向と同じく、社会的な手抜きも出生順位との間には有意な関連が見られなかった。この結果が得られた理由の1つには、実験課題の手続きの影響が考えられる。本研究では、集団課題1における記述内容を用いて集団課題2を行うと教示していた。そのため、実験協力者の実験に関する感想の中には、「2回目の集団作業が気になって頑張った」や「観光スポットを書くという要領が同じだったので2回目の方が慣れていて」という記述が見られた。すなわち、実験課題の順序性による集団課題2への関心や作業への慣れが記述数の増加をもたらした可能性が考えられる。他方、一部の感想では「出身地ではないので分からなかった」や「どうしても自分が今住んでいる土地の方がたくさん知っているので書けた」という記述が

見られた。予備実験を通して、課題間で記述数に統計的有意差が見られないことを確認したが、実験課題そのものが影響した可能性も否定できない。

一方、集団課題を行う際には、互いに面識のない初対面同士の実験協力者で集団が構成されていた。そのため、「集団の中で役に立ちたかったから」「初対面なので緊張したから」「ほかの人の足を引っ張れないと思ったから」などといった実験協力者の感想から、状況要因によって集団作業に対する動機づけが高められた可能性もある。さらに、長濱・安永(2009)によると、場面における協同性学習の効果は、学習者が他者と一緒に学習する際にどのような認識を持っているかによって異なる。したがって、出生順位と協同作業認識との間に有意な関連が見られなかったことを踏まえると、出生順位と社会的な手抜きとの間に関連が見られなかったことも妥当な結果と考えられる。

出生順位と集団課題における役割との関連

出生順位と集団課題における役割との間に有意な関連が見られなかった。実験協力者の実験に関する感想の中には、「スポットを挙げたプリントで自分が一番挙げたスポット数が多かったので、できるだけ知っていることは発信しようと思いました」「自分が一番年上っぽかったし、率先して取り組むようにした」といった記述が見られた。こ

これらの記述から、本実験における集団課題において、千島・村上(2015)が指摘するキャラ行動の発生がしていたと推察される。すなわち、実験協力者は互いに集団における全体的な状況を把握し、周囲の他者からしかるべき役割の実行が要求されていると考え(後藤, 1999)、その役割期待に沿うように行動していたと考えられる。また、実験協力者は互いに初対面であるために、お互いの家族構成に関する情報を持たない。そのため、直前の個人課題の記述数や年齢といった限られた情報を基に役割期待を推測していたものと推測される。

まとめと今後の課題

本研究では、性格特性を自己記入式尺度と集団課題時に観測される行動指標によって測定し、出生順位との関連について検討した。その結果、依田・深津(1963)や浜崎・依田(1985)などの先行研究と異なり、出生順位と性格特性との間に関連性は認められなかった。金山・笹山(1997)が出生順位に対するステレオタイプが存在することを明らかにしている一方で、近年の研究(例えば、相川(2010)やRohrer et al.(2015), Damian & Roberts(2015)など)では、出生順位と性格特性やソーシャルスキルなどとの間に関連が見られていない。本研究においても、これらの研究と同じく、出生順位と性格特性との間に関連性を示唆する結果ではなかった。したがって、出生順位と性格特性との間に、何かしらの関連性があるとは考えにくい。

最後に、本研究に関する今後の課題について述べる。本研究の課題には、次の2点が挙げられる。第一は、社会的な手抜きを測定するために用いた実験手続きの改善である。すでに集団が構成されている場合、出生順位以外の要因によって集団構成員に対する役割期待が形成されている可能性があるため、初対面の構成員によって集団を構成した。しかし、実験協力者の自由記述からも、初対面

面特有の状況要因が働いていた可能性がある。今後は、数日もしくは数週間程度の課題に取り組む時間を設けるなど、実験課題の改善について検討の余地がある。また、本研究では、統制群を設けた実験デザインを採用していないため、統制群との比較を通じた検討も必要である。第二は、同一家族成員間における出生順位の差異を検討する必要性である。本研究では、家族成員間における出生順位の相違から、性格特性との関連を検討した。しかし、出生順位の相違を検討する際には、同一家族での出生順位の違いに着目する必要もある。

謝辞

本論文は、第1著者が平成29年度に横浜国立大学教育人間科学部に提出した卒業論文を再構成したものである。本実験における集団課題時の発言および役割の分類には、阿部栗里さん、鈴木風哉さん、遠西信一郎さんにご協力いただきました。彼らにも、この場を借りてお礼申し上げます。

脚注

- 1) 発言および役割の分類は心理学を専攻する大学生4名の合議によって行われた。

引用文献

- 相川 充(2010). きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 61, 91-105.
- Belmont, L., & Marolla, F. A. (1973). Birth order, family size, and intelligence. *Science*, 182, 1096-1101.
- Bleske-Rechek, A. & Kelley, J. A. (2014). Birth order and personality: A within-family test using independent self-reports from both firstborn and laterborn siblings. *Personality and Individual Differences*, 56, 15-18.

- 千島 雄太・村上 達也(2015). 現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連—“キャラ”に対する考え方を中心に— 青年心理学研究, 26, 129-146.
- 千島 雄太・村上 達也(2016). 友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応—中学生と大学生の比較— 教育心理学研究, 64, 1-12.
- Damian, R. I. & Roberts, B. W. (2015). The associations of birth order with personality and intelligence in a representative sample of U.S. high school students. *Journal of Research in Personality*, 58, 96-105.
- 後藤 将之(1999). 役割期待 中島義明・安藤清志・子安増生・板野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣 pp. 850-851.
- 浜崎 信行・依田 明(1985). 出生順位と性格(2) : 3人きょうだいの場合 横浜国立大学教育紀要, 25, 187-195.
- 金山 富貴子・笹山 郁夫(1997). 「きょうだい型」ステレオタイプの検討 福岡教育大学紀要, 46, 209-220.
- Latane, B., Williams, K., & Harkins, S. (1979). Many hands make light the work: The causes and consequences of social loafing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 822-832.
- Lejarraga, T., Frey, R., Schnitzlein, D. D., & Hertwig, R. (2019). No effect of birth order on adult risk taking. *PNAS*, 116, 6019-6024.
- Marini, V. A. & Kurtz, J. E. (2011). Birth order differences in normal personality traits: Perspectives from within and outside the family. *Personality and Individual Differences*, 51, 910-914.
- 三木 安正・天羽 幸子(1954). 双生児にみられる兄弟的性格差異と家庭での取り扱い方—双生児研究その2— 教育心理学研究, 3, 141-149.
- 三木 安正・木村 幸子(1954). 兄的性格と弟的性格—双生児研究その1— 教育心理学研究, 2, 69-78.
- 長濱 文与・安永 悟・関田 一彦・甲原 定房(2009). 協同作業認識尺度の開発 教育心理学研究, 57, 24-37.
- 並川 努・谷 伊織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之(2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 心理学研究, 83, 91-99.
- 小倉 広(2014). アルフレッド・アドラー 人生に革命が起きる100の言葉 ダイアモンド社.
- Rohrer, J. M., Egloff, B., Schmukle, S. C. (2015). Examining the effects of birth order on personality. *PNAS*, 112, 14224-14229.
- 清水 弘司(1998). はじめてふれる性格心理学 サイエンス社.
- Sulloway, F. J. (1996). Born to rebel: Birth order, family dynamics, and creative lives. New York: Academic Press.
- 依田 明・深津 千賀子(1963). 出生順位と性格 教育心理学研究, 4, 239-246.
- 吉田 俊和(1991). きょうだい関係 松田 惺(編) 「新・児童心理学講座 第12巻—家族関係とこども」 金子書房 pp.107-136.
- 和田 さゆり(1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.
- Zajonc, R. B., Sulloway, F. J. (2007). The confluence model: Birth order as a within-family or between-family dynamic? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33, 1187-1194.

付表1 実験課題に対する実験協力者の感想

-
- 個人課題1について
- ・どちらかという1回目のほうが頑張った
 - ・2回目はみんなで協力すればいいと思った
 - ・出身地(地元)だから多く書けた
 - ・どちらも自分の出身ではないため、よりのなじみのない東京の観光地を考える方が大変だった
 - ・1回目は馴染みがないから頑張った。2回目は飽きてしまった。自分の出身県だから頑張らなくてもできた
 - ・東京は観光スポットが多いので、駅から思い出すのに苦労した。
 - ・集団の時はほかのだれかがやってくれるだろうと思っていた
 - ・頑張ってひねり出そうとできた。2回目は自分の限界がわかったし、他力本願であんまり頑張れなかった
 - ・住んでいないからこそ分からないけれど頑張った
- 個人課題2について
- ・出身地だから
 - ・こちらの課題の方が良く知ってたから
 - ・東京のほうが観光地が多いから
 - ・横浜出身なので、地元のほうがスポットを書き出せると思ったから。集団の中でせっかくなら役に立ちたかったから
 - ・自分が言ったことのある観光地の具体的な名称が思い出せないことが多くて、苦労した点で頑張りました
 - ・思い出そうと心掛けた場所を考えたら
 - ・1回目が全然書けなかったから(頑張った)
 - ・1回目よりも思い出すのが困難だったが、その分努力した
- 集団課題について
- ・時間がなかったので誰かが話をガンガン進めていく必要があると思って話した。
ご飯など、目的が確かなものから決めていこうと思った
 - ・時間の使い方
 - ・楽しく、楽しく。神奈川の観光スポットがあまり分からなかったので神奈川出身の人に任せようと思った
 - ・みんなの意見が多く聞けるようにと思った。初対面なので緊張した
 - ・プランを立てる際、交通機関を使ってかかる時間をなるべく小さくし、スポットの観光に時間をかけるように考えた
 - ・時間が思っていたよりも短かったので、時間を気にするようになった。
完璧なプランを考えることよりもスムーズな話し合いを意識した
 - ・ほかの人がどんな様子だったか
 - ・時間が10分しかなかったので、特に終了時間から逆算して話していくことを考えた
 - ・何か発言しなきゃと意識していた
 - ・とにかく時間に間に合うようにしか考えてなかった。あとは、あんまり独りよがりにならないようにとか
 - ・みんなが進めてくれたので、足りないところを補ったり、所々で意見を言ったりした
 - ・なるべくしゃべった。初対面の人ばかりなので沈黙にならないように
 - ・話し合いのテーマがアバウトだったので少し方向付けをしようと思って最初話を切り出した(誰と行く想定か～など)
 - ・10分と短かったので、時間を気にしたがすんわり決まってよかった
 - ・最初は様子を見てしまった
 - ・話し合いがスムーズに進むことを最優先で考えた
 - ・雰囲気明るく話が進んでいけばいいと思い、暗くならないように気を付けました。
時間は、残り少なくなってから気付いて急ごうと心掛けた
 - ・なるべく会話する、他の人の意見を尊重する。他の人の意見を否定しない
-